



Title	「人民の権利」党をめぐる : その形成から「崩壊」まで
Author(s)	稲掛, 久雄; Inagake, Hisao
Citation	スラヴ研究, 32, 106-126
Issue Date	1985
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5148
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113244.pdf



「人民の権利」党をめぐって

——その形成から「崩壊」まで——

稲 掛 久 雄

はじめに

1880年代後半から1890年代にかけて、ロシア革命運動のなかに、政治的自由の獲得を共通の目標として、リベラルをも含めたあらゆる反政府勢力の連合を実現しようとする動きがあらわれた。こうした動きは、国内では、M. A. ナタンソンのイニシアティブの下、1893年夏にサラトフで結成された「人民の権利」党《Партия „Народного Права”》(以下「権利」党と略)によって代表される。この党は、社会主義者とリベラルをともに自らのうちに「合同」することをめざして、ロシア各地に組織網を拡大する一方、1894年春、スモレンスクの印刷所からその綱領的文書『人民の権利』党宣言《Манифест социально-революционной партии „Народного Права”》(以下「宣言」と略)とパンフレット「焦眉の問題《Насущный вопрос》」を刊行したが、同年4月、ペテルブルクの第一次「人民の意志」グループ《Группа народолюбцев》¹⁾とともに権力の摘発を受け、あえなく「崩壊」した。しかし、生き残った活動家たちは、その後も「人民の権利」結社《Общество Народного Права》を自称して幾つかのパンフレットや論集を発行するなど、様々な形で活動を続け、今世紀初頭には多くが「解放同盟」やエスエル党のメンバーとなるに至った²⁾。本稿では、以下、この「権利」党について、主に、〔I〕その形成過程および組

1) 1891年10月に結成されたグループ。機関紙『人民の意志』グループ・小新聞《Летучий Листок группы народолюбцев》第1, 2号を含む計12点のパンフ類を刊行しつつ、労働者のあいだで政治闘争の煽動を行なった。メンバーは M. C. アレクサンドロフ, A. И. ニキチンスキー, В. И. ブラウド, A. A. フェドゥーロフ, A. A. スカビチェフスキー, П. К. チェルマークら。このグループについては、См. П. Куделли, Народолюбцы на перепутьи: Дело Лахтинской типографии с приложением документов и “летучих листков” группы народолюбцев” 1892 г. и 1895 г., Л., 1925. 機関紙第1, 2号が стр. 49-99 に所収); M. C. Александров, “Группа народолюбцев” (1891-1894 гг.), 《Былое》, 1906, №. 11, стр. 1-27; С. Слетов, К истории возникновения партии Социалистов-Революционеров, Пгр., 1917, стр. 34-35. なお、このグループは1894年秋に再建され、1896/97年まで続く(第二次「人民の意志」グループ)が、その機関紙の主張は社会民主主義的で、第一次グループとは著しく異なっている。

2) さしあたり「権利」党およびその活動家が発行した文献を列挙しておきたい。①《Манифест социально-революционной партии “Народного Права”》(1894); ②《Насущный вопрос》(1894); ③《Александр III (к десятилетию коронации)》(1894?; A. И. Богданович 筆) ④《Первый год Николая II》(1896; M. П. Миклашевский 筆); ⑤《Борьба》№. 1 (1896); ⑥《От С.-Петербургской группы народолюбцев к забастовавшим рабочим》(1896); ⑦Сборник《Наше время》№. 1 (1897); ⑧《Памяти М. Ф. Ветровой》(1898); ⑨Сборник《Наше время》№. 2 (1898). ③は第一次「人民の意志」グループ印刷所から出たものであるが、執筆経緯・内容とも不明。④⑤⑦⑧⑨が「人民の権利」結社の出版物。⑥は⑦に収録。またこれらの他に、活動家が個人的に発行したと考えられるふたつの檄文がある。⑩《Воззвание (В. С. Арефьев?; 1896. 1. 1); ⑪《К русскому обществу》(И. М. Зобнин?; 1895/96)

「人民の権利」党をめぐる——その形成から「崩壊」まで——

織拡大過程と〔Ⅱ〕「崩壊」以前に出たふたつの文書、「宣言」と「焦眉の問題」の概要を紹介・検討し、併せてこの時期の「人民の意志」派などのグループとの関係について、ごく簡単に述べたいと思う。1894年4月以降の活動家たちの動きについては、また稿を改めて論じたいと思う。

ところで、「権利」党については、1972年、シロコーヴァによって唯一本格的な研究が出されている³⁾。この研究は、(1)「権利」党を「ブルジョア・リベラリズム」などと結びつけて考えていたそれまでの幾つかの研究に対し、この党の「革命的」性格を強調すること、(2)少なからぬ「ナロードニキ的誤謬」を残しながらも、「もっぱら政治的な闘争を、もっぱら政治的な綱領で基礎づけ」⁴⁾たこの党の志向や活動を「進歩的」なものとして評価すること、の二点を骨子として、様々な史料を駆使しつつ、この党の全体像を浮き彫りにしようとしたものである⁵⁾。本稿がこの研究に多くを学んでいることはいうまでもない⁶⁾。ただ、彼女の研究は、「権利」党の果たした歴史的役割について、この党が古参の革命家と「民主主義インテリゲンツィアの最良の代表者たち」を結びつけたことや1890年代ロシアの「政治的活発化を促進した」ことなどを指摘するものの、今世紀初頭の具体的な運動の展開に対して、「権利」党がどのような土壌を準備したのか、という点については、必ずしも多くを語っていない。本稿は、さしあたりこの点を念頭に置きながら、1890年代から1905年革命前夜にかけての革命運動の流れのなかで「権利」党が持っていた意味について、私なりに考えていこうとする作業へのワン・ステップである。なお、本

3) В. В. Широкова, Партия «Народного Права»; из истории освободительного движения 90-х годов XIX века, Саратов, 1972.

4) 『レーニン全集』, 大月書店, 第1巻, 348頁。

5) シロコーヴァの「権利」党についての考えは、まとめると、およそ次のようになろう。①「ブルジョア・リベラリズムと比較すると」「権利」党は「より左翼的かつラディカル」である。その理由は、(a)「党にとって政治的自由の獲得がその綱領における単なるミニマム・第一歩に過ぎなかった」こと、(b)この党が革命的戦術と民主主義的構成を持ち、指導部に革命家を戴いていたこと。従って、「権利」党の「正統の相続人」「明確な、首尾一貫した、成熟した継承者」が「解放同盟」であったとするレーニンの言葉（『レーニン全集』, 同, 第6巻, 217頁）については、その解釈のさい、「相続人、継承者が先行者とは強く異なり得るということを考慮する必要がある」(стр. 177)。「権利」党は「革命党」へ非社会主義的要素を引き入れようとした試みなのであり、「ロシアにおける革命的なブルジョア的民主主義の右翼」として評価するのが妥当である(стр. 175; 177)。②「権利」党は、多くのナロードニキ的誤謬をひきずっていたが、「民主主義的課題」のみを綱領に掲げた点で、ナロードニキ主義や人民の意志主義に比べ一歩前進しており、その志向や活動は「ブルジョア民主主義革命」という歴史的課題から見た場合、「進歩的」な意義を持っていた(стр. 78-79; 157-158)なお、シロコーヴァの研究に対しては、のちに М. Г. Седоф (《Вопросы истории》, 1974, №. 3, стр. 148-150) と В. В. Шерохаев (《История СССР》, 1974, №. 4, стр. 191-193) によってそれぞれ批判的な書評がなされている。なかでも Шерохаев は、シロコーヴァが「権利」党の革命的民主主義的側面にばかり着目しているとして、この党における「ブルジョア・インテリゲンツィア」の要素を重視しつつ、この党を「解放同盟」の「血族」としている。ついでながら「権利」党を「解放同盟」の先駆とする考えは、アプローチの仕方こそむろん異なるものの、一部の欧米史学においても見られる。例えば、S. Galai, *The Liberation Movement in Russia, 1900-1905*, Cambridge Univ. Press, 1973, p. 59, 64, 65などを参照。

6) 全体として本稿は、シロコーヴァの研究に負うところが大きいですが、とりわけ未公開史料に基づく記述部分については、彼女の研究に依拠せざるを得ない。その場合は、直接史料を明示せず、単に СМ. として彼女の研究のページ数のみを示す。

稿は、いまだ研究不十分な段階での粗笨なノートの域を出ず、続稿を含めた今後の更なる研究への足掛かりのひとつに過ぎないことをお断りしておきたい。

1

まず、前置きとして、「権利」党結成に先行すること数年前から顕在化していた反政府勢力連合の志向について、ごく大まかに触れておきたい。このような志向を持つグループとしては、およそ次の五つが挙げられる。①モスクワの『自治《Самоуправление》』紙（1887-1889年；計4号）グループ、②M. B. サブナーエフを中心とするグループ（1889-1890年）¹⁾、③B. П. バルィビンを中心にトヴェーリで活動していたグループ（1892-1893年）、④『自由ロシア《Свободная Россия》』紙（ジュネーブ；1889年；計3号）を発行したB. Л. ブルツェフら亡命革命家のグループ、⑤『小新聞《Летучие Листки》』（ロンドン；1893-1899年；計46号）を刊行した同じく亡命グループ「自由ロシア出版基金《Фонд Вольной Русской Прессы》」（以下「基金」と略）²⁾これらのグループは、個々に見れば、社会主義者とリベラルとの「同盟」あるいはあらゆる反政府勢力のひとつの党への「合同」と、その主張を少しづつ異にしていたが、いずれにせよ、共通するのは、政治的自由の獲得に向け、リベラルを含めたあらゆる反政府勢力の連合を訴えることであった。因みに、①は、「そのスローガンの下に」「最良の」「ゼムツィ」などを含めた反政府勢力が「署名し得る」機関紙という意図の下に、ジュネーブの革命家たちの援助を得て『自治』紙を刊行した。その第一号には、グループの政治的要求（「人民代表制」「広汎な地方自治」「普通選挙権」「言論、信教、出版、結社、集会および選挙のさいの煽動運動の完全な自由」と並んで経済的要求（「土地の国有化《национализация》」など）も掲げられていたが、第二号には、経済的諸問題を一時棚上げにして、政治的自由の実現に向けリベラルと「同盟」することが「現在唯一の実践的事業である」という主張が掲載されていた³⁾。また③は、1893年初めから秋にかけて計3号の論集『同盟《Союз》』を刊行し、(1)あらゆる革命諸派が共同でひとつの基金、図書室、印刷所などを設立すること、(2)革命家のみならず「教養ある階級《культурные классы》」をも引きつけ得るような綱領を創出すること、などを訴えたが、その綱領に当たるものは1893年春までに書かれ、「社会主義者—革命家の連合グループより《От соединенных групп социалистов-революционеров》」と題するパンフレットとして発行された。それは、あらゆる反政府勢力に対し、「人民社会革命党《Народная социальная революционная партия》」というひとつの党をともに

- 1) このグループは、なんらの文書も発行しないままに消えたが、一時サラトフ、モスクワ、コストロームなど各都市に組織網を持ち、かなりの勢力をなしたようである。См. М. С. Александров, указ. соч. стр. 5-6. その目的は、「『人民の意志』派、ナロードニキ、社会民主主義者及び他の反政府グループを連合する」ことであった。См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 24.
- 2) シロコーヴァは⑤についてあまり言及しないかわりに、これらのグループの他、カザンのグループ「クラブ《клуб》」（1891-1892年）や新聞『自由《Свобода》』（ジュネーブ；1888-1889年；元「ナバート」派の編集）などについて述べている。Там же, стр. 22; 27-28. これらのグループについては今後よく検討してみたい。
- 3) См. Там же, стр. 19-21; Её же, Газета《Самоуправление》, 《Вопросы истории》, 1982, №. 11, стр. 180-184.

「人民の権利」党をめぐる——その形成から「崩壊」まで——

組織することを提案すると同時に、実現されるべき政治的要求（「リーチノスチ、出版、集会……の自由」「請願の権利」「普通選挙権」など）と経済的要求を掲げていた。しかし、経済的要求の方は、「大小工場の労働者の保護」など、ごく短かく述べられるにとどまっていた⁴⁾。④の主張は、『自由ロシア』紙第一号紙上に明確に示されている。「政治的自由——本機関紙の綱領を一言で表現するならば、この言葉に尽きる」「いまは他のいかなる課題にも力を割いてはならず、つねに一つに焦点を定めるべきである」「我々は自由主義者とも連帯するものである」「我々は一つの反政府党に結集し、共通の任務を果してゆく必要がある」⁵⁾。また⑤は、1891年6月、ステブニャーク＝クラフチンスキーらによって設立され、「ロシアにおけるあらゆる革命的・反政府的フラクシオンを力の限り公平に支援」⁶⁾するため、非合法文献の流布や叢書《издания》（計29点）の出版などの活動を精力的に展開した。その活動の中心人物ステブニャークの主張は、当面、英米における政治的自由に比べ「極めてつつましい」自由の獲得に向け、リベラルとの「同盟」を実現する必要がある、というものであった⁷⁾。

ところで、以上のようなグループが、1880年代後半から現われてきたことの背景としてはおよそ次のふたつが考えられる。(1)「人民の意志」党崩壊以降の革命運動の鎮静化のなかで、その再興をめざす人々が、リベラルをも含めた反政府勢力の「内的不和」をとり除き、「最も広汎な相互の寛容さ」⁸⁾をもって運動の基盤を拡大する必要性を痛感していたこと、(2)「人民の意志」党敗北の経験にふまえて、革命家たちが、ひとり「革命家」や「若者」のみでは、いかなる英雄的行為をもってしても専制を打倒することはできない、という意識を持つに至ったこと⁹⁾。また、これとは別に、「人民の意志」党が、「アレクサンドルⅢ世への手紙」のなかで、政治的自由の賦与や議会の召集を条件にテロル活動を停止し、合法的・平和的な活動に移行することを声明して以来、革命家たちの考えが、政治的自由の獲得を従来に増して重視する方向へ転回し、それに伴って、彼らが、既に「党の準備活動」においても指摘されていたリベラルとの共闘の可能性¹⁰⁾に対し、より積極的・現実的な意味を見出すようになったことも考えられる¹¹⁾。が、いずれにせよ、「権利」党

4) См. В. В. Широкова, Партия «Народного Права»..., стр. 28-33; В. Чернов, Записки социалиста-революционера, Берлин, 1922, стр. 140-141.

5) V. L. Брульцев (狩野亨訳), 『孤堡—回想・自由ロシアへの闘い—』, 富山房, 1981年, 54-56頁。

6) 《Летучие Листки издаваемые Фондом Вольной Русской Прессы в Лондоне》, №. 1 (93. 12. 25), стр. 4.

7) С. Степняк, Чего нам нужно и начало конца, Лондон, 1892, стр. 32-33. なお、「基金」については、不十分なものであるが、拙稿「ステブニャーク・クラフチンスキーと『自由ロシア出版基金』」, 『北大史学』, 第24号, 1984年, 52-61頁も参照してほしい。

8) Там же, стр. 6-7.

9) (2)のような考えは、Там же, стр. 9にも、「権利」党の「焦眉の問題」(Насушный вопрос, Лондон, 1895, стр. 9)にも共通して見られる。

10) См. Революционное народничество семидесятых годов XIX века, т. II, М.-Л., 1965, стр. 180. 田坂昂編訳『テロルと自由』, 新泉社, 1976年, 158頁。

11) 「アレクサンドルⅢ世への手紙」以降、政治的自由の重要性が増したことについては、既に佐々木照央氏が指摘している。佐々木照央「帝政ロシアの自由と飢饉—19世紀90年代の亡命者達の論争」, 『ロシア史研究』, 第36号, 1982年, 26頁。

は、およそ以上のような背景の下、①～⑤の諸グループの延長線上に形成されたのである。ついでながら、以上の①～⑤の諸グループに関与した人々のうち、次のような人々が、少しのち「権利」党の活動に参加（あるいは関係）するに至ることを指摘しておきたい。①のメンバー、A. C. ベレフスキー（『自治』紙第1・2号を編集）、H. K. ミハイロフスキー（同紙第3・4号を編集）、B. A. ゴリツェフ、①に関与し、③にも関係して「社会主義者—革命家の連合グループより」を執筆したと推定される¹²⁾ П. Ф. ニコラエフ、②のメンバー・A. B. サゾーノフ、③のメンバー・И. З. ポポフ、C. B. ソートニコフ¹³⁾。

2

さて、「権利」党は、ナタンソンの周辺に形成されていたサラトフの元流刑囚・インテリゲンツィアのサークルから起こり、やがて多くの元「人民の意志」派活動家を含む112名¹⁾の参加者・関係者を擁する組織となった。ここでは、その形成過程をかいつまんでまとめておきたい。

〔I〕ナタンソンがサラトフに姿を現わしたのは、1890年秋のことである²⁾。かつて「土地と自由」結社の定住地活動の拠点であったサラトフは、この頃「首都在住の権利を奪われた革命家たちのお気に入りの都市」³⁾になっており、多くの元流刑囚や大学を追われた「政治的要注意人物」の若者たちがここに居を定めていた⁴⁾。ナタンソンは、この街でリャザン・ウラル鉄道に職を得るとともに、これらの人々のあいだで「中心的な位置」⁵⁾を占めるようになり、やがて社会主義者とリベラルを「合同」する新党という、既に構想していたプランを実行に移しはじめた⁶⁾。ナタンソンの周辺に集まったのは、П. С. ステーパーノフ⁷⁾、С. С. ステーパーノフ⁸⁾、Н. Д. ロツソフ⁹⁾、А. Л. ブレーク¹⁰⁾、О. В. Аптекман¹¹⁾らであった。これらの人々が、それぞれどのような経緯でナタンソンの構想に共感するようになったのかは、殆ど明らかではない。しかし、いずれにせよ、このサ

12) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 30.

13) ベレフスキーとソートニコフは元「人民の意志」派。ニコラエフは60年代にインシューチン・サークルと関係。ゴリツェフとベレフスキーはのちカデットとなるが、ミハイロフスキーを除く4人はエスエル党へ移行する。

1) シロコーヴァの研究の末尾には112名の《народоправцы》と51名の《возможные народоправцы》の一覧表が付されている。ここで《народоправцы》という場合、彼女は、そのなかに、党のメンバーだけでなく、広く党の見解を分かち持ち、その活動に関係した人々（ミハイロフスキーやコロレンコら）をも含めている。См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 105。「権利」党の場合、ある人間がメンバーであったかなかったかを確定するのは難しい。そこで本稿でも「活動家」「参加者」「関係者」など多少曖昧な表現を用いることになる。

2) Г. Ульянов, Воспоминания о М. А. Натансоне, 《Каторга и ссылка》, 1932, №. 4, стр. 63.

3) Там же, стр. 62.

4) Там же, стр. 63; О. В. Аптекман, Партия “Народного Права” (по личным воспоминаниям), 《Былое》, 1907, №. 7, стр. 185.

5) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 187.

6) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 40.

7) 8) П. С. が兄。ふたりとも元「人民の意志」派。

9) 元「人民の意志」派。のちエスエル党へ。

10) 元「土地総割替」派。「人民の意志」党にも協力。のちエヌエスとなる。

11) 元「土地と自由」結社員。ゼムストヴォ医師。なお(7)～(11)およびそれ以外のナタンソンのサークルのメンバーについては、См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 35-36.

「人民の権利」党をめぐる——その形成から「崩壊」まで——

ークルは、数年後に結成される「権利」党の萌芽であった。その活動は、まず、①学生インテリゲンツィアのあいだでの自己形成サークルの組織、②「芸術愛好家協会《Общество любителей изящных искусств》」¹²⁾における報告や討論への参加からはじまった。とりわけ、②の協会は、サラトフのリベラルと「ラディカル」がともに集う「サラトフ・インテリゲンツィアの知的生活」の「中心」¹³⁾であり、これをフランス革命のさいの様々な政治クラブの萌芽のように考えていたナタンソン¹⁴⁾やそのサークル員たちは、ここで行なわれる報告や討論に積極的に関与した。その結果、協会で行なわれる討論などのテーマは、「もっぱら芸術的文学的な」ものから「批判的—社会評論的な、明らかに折からの飢にラディカルなニュアンスのある」ものへ変わったといわれる¹⁵⁾。このような変化の背景に飢饉の影響があったことはいうまでもない。ナタンソンは、この飢饉に伴うインテリゲンツィアの活性化を見て、それを利用しつつ新党形成に向かおうと考えていたようである。アプチェクマンは、飢饉により「社会的憤怒が煮えたぎりはじめた。……このような社会的モメントは利用する必要がある。そしてナタンソンは、このような方向で活動しはじめたのである」と書いている¹⁶⁾。実際、ナタンソンは、飢饉の衝撃のなかで、妻ヴァルヴァラ・イヴァノヴナやサークル員たちとともに飢民救済運動に参加する¹⁷⁾一方、医師・弁護士・ゼムツィらによって行なわれた政府批判のパンケットを主導する¹⁸⁾など、活発な活動を展開した。また、1892年5月、元ナロードニキの作家 Н. Е. カローニン（ペトロパヴロフスキー）がサラトフで死亡すると、ナタンソンは、この機会にリベラルを含めた多くの人々を結びつけるべく葬儀（デモ）を提起し、敢行した¹⁹⁾。他方、この年春以降、ナタンソンのサークルには、次のような人々が新たに加わった。Л. С. アレクサンドロヴァ²⁰⁾、Н. П. フォニャコーヴァ²¹⁾、Е. М. トロイツカヤ²²⁾、Н. С. テュッチェフ²³⁾、И. И. モレソン²⁴⁾、В. С. アレフィエフ²⁵⁾、М. А. ロマーシ²⁶⁾ら。アプチェクマンは、「飢饉はサラトフ・サークルの更なる発展に決定的な刺激をもたらした」と書いている²⁷⁾。こうしたなかで、ナタンソンは新党形成に向けた本格的な準備を開始するのである。

12) リベラルな県知事 А. И. コーシチの下、ゼムストヴォ医師 В. А. コボソフの発議で生まれた。毎週の集まりでは、様々な文学的テーマを持つ報告が行なわれ、討論が交わされていた。См. Г. Ульянов, указ. соч., стр. 73-74; О. В. Аптекиан, указ. соч., стр. 188; В. В. Широкова, указ. соч., стр. 36-38.

13) Г. Ульянов, указ. соч., стр. 73; В. Чернов, указ. соч., стр. 43.

14) Там же, стр. 74.

15) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 188.

16) Там же, стр. 189.

17) ナタンソンの飢民救済運動への参加の動機は、それが「勤労大衆により接近し、彼らの生活や気分や志向を学ぶ可能性を与える」からであった。Г. Ульянов, указ. соч., стр. 72.

18) Е. Кускова, Давно минувшее, 《Новый журнал》, 1957, №. XLIX, стр. 158-159.

19) См. Г. Ульянов, указ. соч., стр. 75-76; В. В. Широкова, указ. соч., стр. 39-40.

20) 21) 22) ゼムストヴォ保健婦。20) と 22) は元「人民の意志」派。

23) 元「土地と自由」結社員。のちエスエル党へ。ゼムストヴォ統計局勤務。

24) 県ゼムストヴォ医療統計局勤務。

25) のちエスエル党へ。民俗学者となる。

26) 80年代にカザンにあったナロードニキ系サークルの参加者。なお、(20)～(26) およびそれ以外の参加者については、См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 43-45; 47.

27) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 189.

〔Ⅱ〕1892年春から夏にかけての動きのなかで重要なのは、新機関紙発刊をめぐる動きである。ナタンソンは、この時期、「社会のすべての反政府的要素を連合し、立憲的民主主義的な世論の組織を促進する¹⁾」ような機関紙の創刊をめざして、①ペテルブルクのミハイロフスキー、②ニジェゴロドの В. Г. コロレンコとの接触を試みた。①ミハイロフスキーとの接触は、ナタンソンが仕事の都合で首都に赴いたさいに行なわれた。ミハイロフスキーは、この年1月、第一次「人民の意志」グループ印刷所から「自由の言葉《Свободное Слово》」と題する檄文を発行し、「ゼムスキー・ソボールの召集」を訴えていたが²⁾、その後グループとの考えの行き違いから、それとの関係を疎遠なものにしていた³⁾。既に「人民の意志」党に関与していた頃からリベラルを高く評価していたミハイロフスキー⁴⁾にとって、ナタンソンの構想は、リベラルとの連合に否定的な第一次「人民の意志」グループの思想⁵⁾よりもはるかに自らの考えに近いものであったろう。実際、彼は、ナタンソンの提起する新機関紙の編集を引き受けることに同意し、彼の周辺にいた К. А. ヴェルネル⁶⁾とともに、ナタンソンのプランへの全面的な協力を約束した⁷⁾。ナタンソンは、同じ頃、モスクワでも Н. М. アストゥイレフ⁸⁾および П. Ф. ニコラエフと連絡をとったのち、サラトフの同志たちのあいだで「もっぱら立憲的（政治的）傾向の機関紙を発行することができるかどうか」をめぐる討論に入った。この討論は、かなり長い時間を要したようである。しかし、最終的には、次のような点で合意が成立した。「現在の我々の力は些細なものである。従って我々は我々の綱領や戦術を全面的に《В полном объеме и во всех направлениях》展開することはできない」「我々が遭遇している歴史的モメントは、政治的自由の獲得に向け全闘争勢力を集中することを無条件に要求している」「現在緊急に必要なことは、広汎な社会層のなかでの政治的自由の思想の強力なプロパガンダである」⁹⁾ ②コロレンコとの関係は、アプチェクマンを通じて結ばれた。5月、アプチェクマンが医師としてニジェゴロド県に赴いたとき、ナタンソンは彼にコロレンコや Н. Ф. アンネンスキー¹⁰⁾と接触して機関紙への協力を依頼するよう要請した¹¹⁾。コロレンコは1880

1) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 189.

2) 「自由の言葉」は、Л. С. Александров, указ. соч., стр. 15-17; [Н. С. Русанов], По поводу недавних прокламаций, Женева, 1892, стр. 1-2 に所収。

3) この経緯については、См. Л. С. Александров, указ. соч., стр. 19.

4) 因みに彼は『人民の意志』第3号(1880. 1. 1)に次のように書いている。「リベラルとの同盟は」「恐るべきものではない」。「多くのリベラルは、あなた方が思っているよりもはるかにあなた方に近い。彼らがロシアの生活の条件の特殊性を明確に理解しているとすれば、なおさらである」(Политические письма социалиста; Письмо второе). См. Литература социально-революционной партии "Народной Воли", [Париж], 1905, стр. 174.

5) 本稿の5を併せて参照。

6) 元モスクビーチ。См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 42-43.

7) Там же; О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 189.

8) ニコラエフと密接な関係のあったモスクワの「人民の意志」派活動家。ペテルブルクの第一次「人民の意志」グループ印刷所から「飢えた農民への第一の手紙《Первое письмо к голодающим крестьян》」を出したことで知られたが、1892年3月逮捕され、彼のサークルも崩壊した。См. Г. С., Мужичкий Доброхот, 《Каторга и ссылка》, 1931, №. 7, стр. 130-137.

9) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 189-190.

10) 1887-1895年、ニジェゴロド県ゼムストヴォ統計局主任。

11) Там же, стр. 191; В. В. Широкова, указ. соч., стр. 47. アプチェクマンの回想では、彼がニ

「人民の権利」党をめぐって——その形成から「崩壊」まで——

年代半ばにニジェゴロドに住みつき、作家活動に入っていたが、既にその頃から彼の住居は「シベリア帰りのあらゆる流形囚の宿場、ニジェゴロド在住の要注意人物の集会所¹²⁾」となっており、1890年代初頭には、彼のまわりに、ゼムストヴォ統計家、医師、弁護士、警察監視下にあるインテリゲンツィアなどから成るサークルが形成されていた¹³⁾。それらの人々のなかで最も重要な人物は、А. И. Богдановиッチである。元「人民の意志」派の彼は、1890年代初頭には革命運動に対しシニカルな態度をとるようになっていたが、コロレンコに説得されて『ヴォルガ通報《Волжский вестник》¹⁴⁾紙のニジェゴロド通信員となり、同様に通信員であったコロレンコとともに、郡ゼムストヴォ参事会議長アンドレーエフの貴族銀行私消事件に関するキャンペーンを展開するなど、活発な活動を開始していた¹⁵⁾。アプチェクマンが機関紙への協力を要請したとき、コロレンコは自ら協力するかどうかの確答を与えなかったが、その代わりに、協力者として推薦したのが、このボグダノヴィッチとやはり彼の周辺にいた М. А. Протニコフ¹⁶⁾であった¹⁷⁾。ボグダノヴィッチは、後述するように、やがて「焦眉の問題」の筆者として、「権利」党のなかで重要な位置を占めるに至る。しかし、他方、コロレンコ自身に対する説得も、その後ナタンソンとテュッチェフによって続けられ、その結果、ミハイロフスキーが編集を引き受けたことを知った時点で、コロレンコは機関紙に協力すること同意した。またコロレンコと密接な関係にあったアンネンスキーも、同様に機関紙に全面的に協力することを約束した¹⁸⁾。こうして、6月下旬、機関紙の全体計画や分担を取り決めるための協議がサラトフで行なわれた。そこでは、編集者ミハイロフスキー、協力者コロレンコ、アンネンスキー、ニコラエフ、ボグダノヴィッチ、プロトニコフと決定されたようである¹⁹⁾。しかし、後述するように、この機関誌は、結局、発行されないままに終わることになる。

〔Ⅲ〕1892年夏から1893年9月の結成大会までの1年余は、新党結成に向けた活動が慎重に進められた時期である。1892年春から夏にかけて、ナタンソンと彼のサークルの幾人かのメンバーは、鉄道業務の関係でオリョールに移った。その結果、サークルの活動の中心もサラトフからオリョールに移動したが、この町では、更に次のような人々が新たにメンバーに加わった。А. В. Гегеオノフスキー¹⁾、И. Н. Комарницкий²⁾、ソートニコフ、ポポフ、サザーノフ、А. В. Пещехонов³⁾、С. В. Бонмарев⁴⁾、И. Н. Рибо

ジェゴロドへ赴いたのは「6月半ば」となっている。

12) Ф. Покровский, В. Г. Короленко под надзором полиции (1876-1903 гг.), 《Былое》, 1918, кн. 7 (№. 13), стр. 6.

13) Там же, стр. 10; В. В. Широкова указ. соч., стр. 52.

14) Н. П. Загоскин (Казань大学教授) の編集により 1883 年から出ていた「進歩的」な新聞。さしあたり См. Р. И. Нафигов, Тайны революционного подполья: Архивные поиски и находки, Казань, 1981, стр. 5-100.

15) См. В. Г. Короленко, А. И. Богданович: черты из личных воспоминаний, Собр. соч., т. 8, М., 1955, стр. 144-156.

16) ゼムストヴォ統計局勤務。

17) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 192; В. В. Широкова, указ. соч., стр. 54.

18) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 54.

19) Там же.

1) ~13) 1) 2) 7) 10) 11) 13) は元「人民の意志」派。1) 2) 4) 5) 6) がナタンソンと同じオ

フ⁵⁾, A. C. マルトゥイノフ⁶⁾, Г. П. クリング⁷⁾, エカチェリーナ・バジェノーヴァ⁸⁾, エレーナ・バジェノーヴァ⁹⁾など。また, 1893年に入ると, ナタンソンのサークルとバクー, チフリス, ハリコフの革命家たちとの結びつきも生まれた。1893年夏, バクー・チフリス方面に旅行したナタンソンは, そこで H. M. フレロフ¹⁰⁾, B. A. ボダーエフ¹¹⁾, Г. M. ティシチェンコ¹²⁾らを新党結成活動に巻き込んだ。ハリコフでは M. И. オスロポーヴァ¹³⁾がサークルとの関係を結んだと見られる¹⁴⁾。他方, この時期, オリョールでは, ボグダノヴィッチ, アプチェクマンら他の都市からやってきたメンバーも交えて, 毎週のように新党結成に向けた協議が重ねられていた¹⁵⁾。かくして, 9月, 「権利」党結成大会はサラトフで開催され, シロコーヴァによれば, 次のような人々が参集した。ナタンソンとその妻, ゲジェオノフスキー, ソートニコフ, コマルニツキー, ボグダノヴィッチ, ニコラエフ, Н. П. アレクセーエフ¹⁶⁾, В. П. イヴァンシン¹⁷⁾, アレクサンドロヴァ, プロトニコフ, トロイツカヤ, テュッチェフ, ブレーク, П. С. ステパーノフ, ロツォフ, フォニャコーヴァ, М. И. ジリャコーヴァ¹⁸⁾。ここでは, 後に紹介する党の綱領的文書「宣言」が審議され, 満場一致で採択された¹⁹⁾。しかし「権利」党にとって問題だったのは, この「宣言」を印刷・流布させるための印刷所の設営が, まだこの時期には思うようにはかどっていなかったことであった。このため, 「権利」党は, 大会以降, 自らの主張を文書化し得ないまま, 自らの組織網の拡大を図っていくことになったのである。

3

以下, その組織網の拡大と印刷所設営をめぐる動きについて, ごく簡単に述べておきたい。

〔I〕組織網の拡大は, 党の主な活動家たちの各地への旅行から開始された。ナタンソンは, 多くの都市を訪ね, 流刑から帰った古い革命家を捜すとともに, 新たな支持者を獲得しようとした¹⁾。また, テュッチェフはリヤザンへ, フレロフはハリコフ, ペルミ, エカチェリンブルグへ, ステパーノフはウラルとサラトフへ, ゲジェオノフスキーはオデッサとウファへ, それぞれ足を運んだ²⁾。その結果, ①モスクワ, ②ペテルブルク, ③ハリコフで, それぞれ次のように, 新たな参加者が生まれた。①モスクワでは, 1892年3月に「人民の意志」派アストゥィレフのサークルが崩壊して以降³⁾, 「確信的マルクス主義者⁴⁾」

リョール・グリャージ鉄道勤務。3)と7)はゼムストヴォ統計局勤務。12)は元「土地と自由」結社員。8)は1), 9)はソートニコフのそれぞれ妻となる。これらの人々やこの時期の他の新メンバーについては, См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 47; 55-58.

14) バクー, チフリス, ハリコフに関しては, См. Там же, стр. 58-60; О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 198-199.

15) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 58.

16) 17) いずれもモスクワで印刷所設営活動に携わっていた人物。イヴァンシンはのち経済主義者となる。

18) См. Там же, стр. 62. ジリャコーヴァは元「人民の意志」派。ゼムストヴォ保健婦。

19) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 63-64.

1) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 198.

2) См. В. В. Широкова, указ. соч. стр. 90.

3) 195頁注(8)参照。

4) Е. Кускова, Давно минувшее, 《Новый журнал》, 1957. №. L, стр. 178.

「人民の権利」党をめぐる——その形成から「崩壊」まで——

の A. И. リャザノフを中心とするサークルが、学生のあいだで有力となっていた⁵⁾。このサークルは、単にマルクス主義者のみならず、「立憲主義者」П. И. クスコフ⁶⁾、自称「ナロードニキ」の A. Н. マクシーモフ⁷⁾、С. Н. プロコポーヴィチ⁸⁾、それに一時ニコラエフの影響下にあった⁹⁾ E. Д. クスコヴァらを含んでいた。これらの人々のうち、クスコフとマクシーモフは、「権利」党のオルグ活動の結果、党に参加した¹⁰⁾。またプロコポーヴィチとクスコヴァも、この頃既にマルクス主義に接近しはじめていたものの、ある程度「権利」党に関与したと推定される¹¹⁾。更に、この地の学生のあいだでは、E. K. ヤコブレフ¹²⁾、Вл. М. チェルノフ、Н. М. チェルノヴァ¹³⁾、B. A. ジダーノフ¹⁴⁾らが党の活動に引きつけられ、B. M. チェルノフも、1894年初頭、ヤコブレフ、テュッチェフを通じてナタンソンと関係を結んだ¹⁵⁾。他方、学生以外では、この時期、B. A. ゴリツェフと П. Н. ミリュコフも「権利」党と関係するに至った¹⁶⁾。②ここでは、ミハイロフスキーの周辺にいた M. П. ミクラシェフスキー¹⁷⁾、B. B. ヒジニャコフ¹⁸⁾、M. И. ヴォイチンスキー¹⁹⁾らが「権利」党の活動家となった²⁰⁾。③この地では、やがてここに移住したフレロフを中心に、オスロポーヴァとその姉 A. И. スィツァンコ²¹⁾、A. M. ゴリデンベルグ²²⁾らから成る「権利」党のグループが形成された²³⁾。また、④エカチェリンブルク、⑤ベルミ、⑥ヴォロネジ、⑦オデッサ、⑧ウファでは、およそ次のような人々が「権利」党に参加した²⁴⁾。④ И. М. ゴープニン²⁵⁾、A. И. ボロジッチ²⁶⁾、A. B. チェルニャフスカヤ²⁷⁾。⑤ B. И. マノツコフ²⁸⁾、B. И. フロロフ²⁹⁾、B. A. ウラジーミルスキ

5) このサークルについては、См. Там же, стр. 178-179; S. Galai, op. cit., pp. 60-61.

6) 7) 8) いずれもトヴェーリのバルイピンのサークルと接触を持っていた。

9) Cf. S. Galai, op. cit., p. 62.

10) シロコヴァは、クスコフを《народоправцы》にも《возможные народоправцы》にも含まれていない。しかし、彼は「権利」党の活動にかなり深く関与したと思われる。См. E. Кускова, указ. соч., 《Новый журнал》, 1957, №. L, стр. 184-186.

11) シロコヴァは、このふたりを「権利」党活動家とするのを誤りだとしている。B. B. Широкова, указ. соч., стр. 123. しかし、彼らは、恐らくいまだ完全にマルクス主義者にはなり切っておらず、思想的にかなり動揺していたように思われる。(См. B. Чернов, указ. соч., стр. 141-142)。彼らは、「権利」党に対しては、そのメンバーとはならなかったものの、メンバーとなるかどうかをめぐって長いあいだ討論し、その目的や戦術を共感的に迎えていた。E. Кускова, указ. соч., 《Новый журнал》, 1957, №. L, стр. 185. ガライはこのふたりが党に「参加した」と述べている(S. Galai, op. cit., p. 74) が、実際、ある程度の活動への関与があったと考えるのが妥当であるように思われる。

12) サラトフで既にナタンソンの影響をうけていた。のちエスエル党员。

13) Вл. М. チェルノフと Н. М. チェルノフは B. Л. チェルノフの兄と姉。

14) マルクス主義的な立場に立っていた。

15) B. チェルノフをめぐる経緯については、См. B. Чернов, указ. соч., стр. 185-192.

16) См. B. B. Широкова, указ. соч., стр. 92-93.

17) 18) 19) 18) と 19) は当時学生。17) はのち社会民主主義者。

20) См. Там же, стр. 92.

21) 22) 元「人民の意志」派。

23) См. Там же, стр. 97-98.

24) См. Там же, стр. 98-99.; 101-103.

25) 26) 27) 25) 26) は元「人民の意志」派。27) は元ナロードニキ。

28) 30) 31) 元「人民の意志」派。

29) ゼムストヴォ統計局勤務。

—³⁰⁾、И. И. Некрепачев³¹⁾など。彼らから成る「権利」党グループは、1895年4月まで存在し続けた。⑥ П. П. Мамыров³²⁾、И. А. Прозоровский³³⁾、В. Я. Якоблев (Богдальский)³⁴⁾。特にヤコブレフは、1892年春この地に姿を現わして以来、「権利」党の熱心な支持者となるとともに、「地方都市のよどんだ安穩な生活を変える」³⁵⁾ような活動を展開した。⑦ И. Е. Булгаров³⁶⁾とその妻³⁷⁾。⑧ Н. И. Ириинский³⁸⁾、А. П. Козлов³⁹⁾。因みに、シロコーヴァは、これら以外に、「権利」党の活動家が存在した都市として、キエフ、ポルタヴァ、ヴァートカ、サマラなど一連の都市名を挙げている。彼女は、当時の社会民主主義者のグループと比較した場合、「権利」党の組織的規模が大きかったことを強調しようとしている⁴⁰⁾。実際112名というその参加者・関係者の数から判断しても、「権利」党は、1890年代前半の革命運動のなかでは、かなり大きな勢力であったと考えてよからう。

〔Ⅱ〕印刷所設営に向けた動きは、既に1892年からはじまっていた⁴¹⁾。例えば、アレクサンドロヴァとトロイツカヤは、この年、印刷を学ぶため外国へ派遣された。またナタンソンは、元ナロードニキの О. Г. Алексеева の富裕な息子 Н. П. Алексеев と接触し、資金提供を約束させた。このアレクセーエフは、В. П. Иваншин とともにモスクワにアジトを開設し、印刷用紙を獲得するなどの準備を進めた。1893年に入ると、ナタンソンらは、А. И. Венцовский⁴²⁾を通じて、形成されて間もないポーランド社会党と関係し、印刷機獲得のための交渉に入った。この年夏、ユーゼフ・ピウスツキはオリョールを訪れ、密貿易業者を介して印刷機と活字を送ることに同意した。しかし、その約束は、約半年間、果たされないままになっていたようである。印刷機と活字が「権利」党の手に入るのは、この年暮れから翌年初めにかけてのことである。それらは、クリング、ローマン、ポポフ、Е. К. Якоблевらによって、グリャージなどを経由して最終的にスモレンスクに持ちこまれた。スモレンスクが選ばれたのは、この町がさほど警察の監視の目に晒されていないからである。印刷所の設営は、1894年2月にほぼ完了した。この印刷所設営に伴ない、かねてからの機関紙発行計画がいよいよ具体化したことはいうまでもない。機関紙の名称は、『人民の権利』か『自由《Свобода》』のいずれかをミハイロフスキーが選ぶことになっていた。2月には、その第一号に掲載されるべき論文として、ボグダノヴィッチの「焦眉の問題」とそれを補充するアプチェクマンの農業問題に関する論文が審議された。ミハイロフスキーも、第一号のための巻頭論文を用意していたといわれる。またこの印刷所からは、労働者農民向けの新聞やパンフレットも出版される予定であった。アプチェクマンは、これらの文書の印刷のため、マンツ

32) 34)。元「人民の意志」派。

33) 市参事会勤務。

35) Вл. Кранихфельд, В. Я. Яковлев-Богучарский, 《Былое》, 1917, №. 1 (23), стр. 235.

36) 元「人民の意志」派。のちエヌエス。

37) 元「プロレタリアート」。のちエスエル。

38) 元「人民の意志」派(?)。

39) 元「人民の意志」派。のちエスエル。

40) В. В. Широкова, указ. соч., стр. 106.

41) 以下の経過は、Там же, стр. 107-120 による。

42) 元「人民の意志」派(?) 第一次「人民の意志」グループにも「権利」党にも近い立場にあった。

「人民の権利」党をめぐる——その形成から「崩壊」まで——

エヴィッチ、トロイツカヤ、アレクサンドロヴァ、フォニャコーヴァ、A. M. レジャーヴァ⁴³⁾から成る「印刷グループ」が組織されていたことを伝えている⁴⁴⁾。しかし、この印刷所は、結局、摘発までのわずかな期間に、「宣言」とパンフレット「焦眉の問題」を数千部印刷し得たのみに終わった。権力は、既に1893年春からオリョール・サークルの存在を察知しており⁴⁵⁾、秋以降、第一次「人民の意志」グループおよびそれに関係していたB. チェルノフを監視するとともに⁴⁶⁾、印刷機についても、1894年初めからその運搬状況を観察していた⁴⁷⁾。「権利」党は、かくして4月、「崩壊」のときを迎えるに至るのである。

4

ところで、以上のように、1894年春、「崩壊」を目前にしていたとはいえ、印刷所設営とともに本格的な活動に入ろうとしていた「権利」党は、どのような「綱領」・思想に基づいてあらゆる反政府勢力の連合を追求しようとしたのであろうか。ここでは、印刷所から出たふたつの文書、〔I〕「宣言」と〔II〕「焦眉の問題」の内容を大まかに紹介しておきたい¹⁾。因みに、このふたつの文書が出るまでの経緯は、次のとおりである。〔I〕これは党の「綱領」に当たるもので、ボグダノヴィッチ、ニコラエフ、プロトニコフの三人から成る特別な「委員会」によってその草案が書かれ²⁾、結成大会において審議された。ゲジェオノフスキーによれば、この段階においても、「あらゆる注意」を「政治的綱領に集中」することについては、「少なくない」論議が交わされたが³⁾、既に述べたように、大会は、満場一致でこれを採択した。〔II〕「『宣言』の基本原則を更に発展」⁴⁾させたものとして、上述のようにボグダノヴィッチによって書かれ、2月、ナタンソン、テュッチェフ、フレロフ、ゲジェオノフスキー、リボフ、トロイツカヤ、アプチェクマンにボグダノヴィッチを加えた8人から成る「評議会《Совет》」⁵⁾で審議された。そこでは、(1) フランス革命についての「誤った」記述を削除すること、(2) ポーランドなどの諸地域の自治に関する「余り

43) 元「人民の意志」派。のちボルシェヴィキ。

44) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 202-203.

45) См. Из “Обзора важнейших дознаний по делам о государственных преступлениях за 1894 г.”, 《Былое》, 1907, №. 5, стр. 229-230.

46) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 129.

47) Из “Обзора...”, стр. 231-234.

1) 「宣言」は、次のものに転載されている。① Б. Л. Бурцев (ред.), За сто лет (1800-1896), Лондон, 1897, стр. 260-262; ② О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 197-198; ③ 《Летучие Листки ФВРП》, №. 9 (94. 7. 25), стр. 1-2; ④ Из “Обзора...”, 《Былое》, 1907, №. 5, стр. 236-237. ④は言いまわしが他のものとやや異なっている。ここでは①②③の各文献に掲載されているものから訳出した。また、「焦眉の問題」は、《Насушный Вопрос》, Лондон, 1895. (「基金」が再版したもの)。

2) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 196; См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 63.

3) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 63.

4) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 199.

5) 「評議会」という言葉は、Там же, стр. 199; 200; 204に見られる。シロコーヴァは、これについて、「協議の参加者の非公式な名称だろう」と述べ、「権利」党はいかなる機関(organ)も持たないチャイコフツィ的組織だったとしている。См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 64. これに対しては、セドーフが「土地と自由」結社や「人民の意志」党の経験があつてなお、組織的な点でチャイコフツィに回帰するというのは「きわめて奇妙な現象だ」と述べている。《Вопросы

にも色彩を濃くしすぎた」表現を一部削除し、全体的に柔らげること⁶⁾、の二点で修正がなされ、更にミハイロフスキーの点検を受けるという条件がつけられた。ボグダノヴィッチは、他日、ミハイロフスキーを訪れ、彼の「検閲」を受けたのち、この論文をオリエールに持ち帰った⁷⁾。これらの経緯から、このふたつの文書は、いずれも、少なくとも「権利」党の主力活動家のあいだでは、基本的に一致する内容を含んでいたことが知られる。

〔I〕「宣言」は、ごく短かいものである。それは、次のようにはじまっている⁸⁾。「国家生活においては……あらゆる他の関心をあと回しにしつつ、ひとつの問題が最重要な場所を占めるときがある。ひとつの問題とは、人民の未来が、いずれかの方向へのその解決にかかっているような問題である。ロシアは、現在そのようなときを経過しつつある。そして、ロシアの運命を決めるそのような問題とは、政治的自由の問題である。」次いで、「宣言」は、「ゼムスキー・ナチャーリニクの創設」や「諸自治機関の権利の制限」「資本主義的生産の一貫した援助」など、政府が「行政的専横と階級的利害の政策を頑固に」推進していることを批判し、そのような政策の結果、「社会的荒廃《деморальзация》と国の全般的衰微」が明らかになったとして、次のように続けている。「状況のあらゆる危険性を意識する人々は、大衆の利益の方向への決定的な転換以外に、そこからの出口を見出さない。そのことは……代議政治をもって専制に代えることによってのみ可能である。」しかし、政府がこのような変革の道に自主的に入ることは致底期待できない。そこで、「人民にはひとつのことが残されている。組織された世論の力を政府の不動性《неподвижность》と専制の狭い王朝的利益に対抗させることである。『人民の権利』党は、そのような力の創造を考えているのである。」ところで、「党の見解によれば、人民の権利は、政治的自由に対する人民の権利という概念も、人民的生産に基づいた物質的の充足に対する人民の権利という概念も、等しくそのなかに含んでいる。」そのような権利を保証するためには、次のようなものが必要である。「普通選挙に基づいた代議政治、信仰の自由、裁判の独立、出版の自由、集会ならびに結社（団体《ассоциация》）の自由、リーチノスチとその人間的権利の不可侵」および「政治的自由の不可欠な条件」としての「あらゆる民族の政治的自治権の承認」。かくして「人民の権利をこのように理解する」党の課題は、こうした要求の実現＝専制の廃絶に向けて、「国内のあらゆる反政府的要素を連合《соединить》し、活動的な勢力を組織することである。」

〔II〕「焦眉の問題」は、まず、「人民の意志」党など過去の運動の総括にふまえつつ、差し迫った課題の実現に向けて広汎な勢力を連合する必要性を次のように訴えている。「進歩と自由のための戦士にとって導きの星であった、また今もそうであり、これからもそう

истории》, 1974, №. 3, стр. 149. しかし、リベラルとの「合同」を志向していた「権利」党が果たして「人民の意志」党のような中央集権主義的組織をめざしていたかどうか、筆者には少なくともやや疑問に思われる。

6) ボグダノヴィッチはポーランド人で、カトリック信徒として育った。См. В. Г. Короленко, А. И. Богданович, Собр. соч., т. 8, стр. 144-145.

7) この経緯は、О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 200 による。また、См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 73.

8) 以下、煩雑を避けるため、「宣言」についても「焦眉の問題」についても逐一引用ページ数を表示しない。

あり続けるであろう理想を放棄するのではなく、遠いものから焦眉のものを、未来のものから現在のものを、理想的なものから実現可能なものを、厳密に区別する必要がある。生活の現実的利益の基礎に立った焦眉の問題の明確な理解にさいしてのみ、政治活動の中心を……青年学生の孤立的な世界から、より広汎な社会と人民の世界のなかのその本来の場所へ移すことができるのである。……いかなる自己犠牲をもってしても……若者ひとりでは変革を遂行することはできない。それは、ありとあらゆる可能な舞台上で活動する社会グループや勢力が解放運動のカードのなかに入るという条件の下でのみ可能なのである。」次いで、この論文は、政治的自由の獲得がブルジョアジーを利する結果になるという従来からの見解や「人民大衆の利益のために計画的にとられる経済的措置を官僚的絶対主義《бюрократический абсолютизм》から期待する」傾向を批判しつつ、政治的自由の必要性について次のように述べている。「政治的自由のみが人民の利益を守り、人民に……経済的自立性を与えることができる。なぜなら、何よりも政治的自由は、人民に人間と市民の権利を与えるからである。この権利が人民に保障されないうちは、自らの利益を防衛しようとするすべての試みは一揆と見做されなければならない。」「我々の理想」は「そのあらゆる精神的物質的な力の最も完全に正しい発展がそれぞれに保障された自由な人々の社会」である。……そのような理想への道はただひとつ、この道とは政治的自由である。」そして、「焦眉の問題」は、以下、この政治的自由の具体的な内容について、①法の支配、②議会、③信仰の自由、④裁判の独立、⑤言論・出版・集会・結社の自由、⑥民族の同権および連邦制、の6点にわたって、それぞれ具体的な説明を加えている。その内容は、ごく簡単にまとめると、ほぼ次のとおりである。①「政治的自由の理想的目的」は、「最高権力が誰にも——一人の人間にも階級にも階層にも属していない」状態、即ち「法の支配」を確立することである。国家は、法を創出するため、市民に立法者を選出する義務を負わせる。しかし、その立法者たる議会も統治する《управлять》権利は持っていない。「法こそが最高主権者《Верховный властитель》」である。」この点は、政治的自由と「一人の人間や階層……の意志が支配するデスポティズムとの相違の本質」でもある。②議会は、政治的自由のなかで「最も威力あるものである。」なぜなら、それは、「法の権威を篡奪する政府」に抗する武器を持っているからである。「この武器とは、租税の裁可である。」人民は、自らの代表者たちによって裁可された租税を支払うときにのみ「自らを十分自由だと見做す権利を持っている。」「執行権力のあらゆる侵害に対して、人民は租税の支払いの拒否で応ずることができる。」「そのような拒否は、例えばイギリスとその北米植民地とのあいだに起こったような蜂起や内乱を不可避に招くであろう。」ただし、議会が強力であるのは、それが全人民を代表しているときのみである。これが普通選挙の必要な所以である。③「国教はデスポティズムの最強の砦である。」従って、国教の廃止は、「政治的自由の第一幕でなければならない。」それに、現在、ロシア住民のなかで正教徒が占める割合は、 $\frac{2}{3}$ 足らずであり、しかも、そのうちの優に $\frac{1}{3}$ は分離派などである。国教会の廃止は、こうした人々に良心の自由を与え、西欧の宗教改革に似た役割を人民の心のなかで果たすであろう。④「裁判の独立」とは、「リーチノスチと政府のあいだで紛争が起きたさい、後者が有罪とされ得ることを認めることである。独立した裁判官は政府以上のもの

である。」「リーチノスチの不可侵，個人的家族的な生活への不干涉は，政府から独立した裁判なしには考えられない。」⑤これらのなかで最も重要なのは，出版の自由である。「議会が麻痺したとき，裁判が弾圧されたとき……出版物は……世論として……人民の声として登場する。社会的動乱の瞬間には，出版物は，すべての市民がその下に集まる旗である。」「事実上，それは法律以上のものでさえある。なぜなら，法律は出版物の圧力のもとで屈服したり改変されたりするが，英米のようにそれが発達した国々では，「出版物を抑圧し得るような法律は存在しないからである。」また，結社の自由は，とりわけ労働者階級にとって貴重である。それは，資本との闘いのみならず，「現代階級国家における資本主義の巨大な影響との闘いにおいても強力な武器である。」「この自由を基盤としてのみ，西欧の労働者プロレタリアートは，市民的諸権利の実際上の享受を達成し……独立した政治的労働党《политическая партия труда》の形成のために徐々に団結し得たのである。」⑥あらゆる民族の同権は，「ロシア絶対主義が自らを支える三つの柱石，即ち正教・専制・国民性《народность》のうちのひとつを廃絶する」ことである。「国民性の場所を占めるのは，市民性《гражданство》の理念でなければならない。」このことに関しては，現在，辺境と中央とを暴力的に結びつけている専制のセメントが壊滅すると同時に，特に西方辺境がロシアから分離し，ロシアが西欧から切り離されてしまうのではないか，という懸念が存在する。しかし，比較的工業が発達した辺境，とりわけポーランドは，その生産物の市場としてロシアを必要とする。従って，我々は，「時の流れとともに成長する経済的諸利益の自然な関係が……自由なロシア国家においては，銃剣を持った結合者《штык-объединитель》にとって代わり得ると考える。」他方，東方諸地域についても，沿ヴォルガ，ウラルなどの諸地方は，「それぞれの生活の正しい発展」のために「自らの地方的統治形態」を必要としている。つまり，ロシアは，将来「連邦的構成《федеративное устройство》」を持つことが必要なのであり，「未来の自由なロシアの国家制度は，何よりも北米合衆国の連邦制によく似ているように我々には思われる」のである。

以上のように，「焦眉の問題」は，「宣言」で述べられていた政治的要求について，個々に内容的説明を加えることによりかなりのページを費したものである。それは，自ら記すように，「政治的自由の問題の実践的解決にとって極めて重要な」その詳細については，「我々の出版物」のなかでの「議論や解明」に譲りつつ，「政治的自由の全体的シエーマを与えることを考えに入れた」ものである⁹⁾。「権利」党は，結局，概ね以上の①～⑥で述べたような政治的自由の実現を，あらゆる反政府勢力に共通する目標と考え，それに向けて自ら「活動的な勢力」となるべく，リベラルと社会主義者の連合＝「合同」を追求していたといえよう。ただし，ここで注意すべきことは，「宣言」や「焦眉の問題」それ自体は，上述のように，もっぱら政治的自由の必要性やその内容について述べるものであったものの，「権利」党の活動家たち自身は，多くがその政治的自由の獲得を社会主義実現への第一段階として把えていたことである¹⁰⁾。既に述べたように，「権利」党の参加者・関係者の多くは，元「人民の意志」派の活動家たちであった。ゲジェオノフスキーは，結成大会

9) 「宣言」にあった「人民的生産に基づいた物質的必要な充足」という点については，「焦眉の問題」では特に説明が加えられていない。

10) この点では，シロコーヴァの指摘が妥当である。「はじめに」の注(5)参照。

「人民の権利」党をめぐって——その形成から「崩壊」まで——

において、ナタンソンとボグダノヴィッチが政治的自由の獲得に「あらゆる注意を集中する」ことを主張していたものの、大会参加者はみな自らを社会主義者と考えていたことを伝えている¹¹⁾。また、アプチェクマンによれば、「権利」党は、「我々の勢力が強まり、我々の隊列が増大し、社会のなかにしっかりと根づいたとき、そのとき——そのときにのみ——我々のすべての我々の旗を上げよう」「第一歩を踏み出さないで第二歩をしるさない」ようにしよう、と考えていたことが知られる¹²⁾。因みに、社会主義については、「焦眉の問題」のなかにも、次のような記述が見られる。「政治的自由と社会主義とは……わかちがたく結びついている原則である」「政治的自由は……単に社会主義への第一歩であるのみならず、その実現への不可欠な条件である。」ところで、ここで「社会主義」という場合、それがナロードニキ主義的色彩の濃いものであったことも重要である。アプチェクマンは、「焦眉の問題」を補足すべく自ら書いた論文のなかで、『土地と自由』の問題」を扱ったとし、その内容について、何人かの同志から「土地と自由」主義的・革命的ナロードニキ主義的だとの指摘を受けたことを明らかにしている¹³⁾。彼は、この論文について、「『人民の権利』の基本的志向と矛盾するものではなかった」とも述べている¹⁴⁾。他方、「権利」党に関与したチェルノフは、逮捕後オフラーナの提案で書いた「自伝」のなかで、「平和的漸進的な道を通じて、人民的形態における大工業を発達させる」うえでの「共同体的アルテリ的原則」の意義について述べるなど、当時の彼の社会変革思想の一端を吐露している¹⁵⁾。また、このチェルノフは、ナタンソンが彼に対し、「権利」党の綱領の説明を行なったさい、「リベラルから『人民の意志』派、社会民主主義者に至るまでの闘争能力あるすべての者の」「連合」について述べるとともに、「農民が公然と土地と自治を要求することなどについても話したことを伝えている¹⁶⁾。いずれにせよ、「権利」党の活動家たちは、このように、大なり小なり社会革命や経済問題にも目を向け、自らを社会主義者としながら、なお「遠いもの」「未来のもの」「理想的なもの」から「焦眉のもの」「現在のもの」「実現可能なもの」を切り離し、1で述べた①～⑤の各グループとはほぼ同様に、「政治的綱領」を前面に立てて闘おうとしたのである。

5

しかしながら、既に述べたように、以上のような文書を出したころ、「権利」党の「崩壊」のときは迫っていた。印刷所設営とともに、「権利」党は「中央」をオリョールからペテルブルクへ移そうと試みたようである¹⁾。しかし、1894年4月21日、そのペテルブ

11) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 63.

12) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 190.

13) Там же, стр. 202.

14) Там же. また彼はここで、「焦眉の問題」が「ナロードニキ主義」などの「古ぼけた思想の重荷をふり払うべき時だ」などと訴える箇所に注意を向け、ここで批判の対象になっているのは「政治的自由に対し盲目的偏見をもっていた70年代のユートピア・ナロードニキ主義」や「80年代の合法的反動的ナロードニキ主義」だったのだとして、「このことを『人民の権利』主義の歴史的評価のさい、忘れてはならない」と述べている。

15) См. К истории партии Народного Права, 《Красный Архив》, Vol. 1, 1922, стр. 282-288.

16) В. Чернов, указ. соч., стр. 187.

1) О. В. Аптекман, указ. соч., стр. 204.

ルクで活動していた第一次「人民の意志」グループとともに、「権利」党は摘発のときを迎えた。一連の都市で、次のような人々が逮捕された。マンツェヴィッチ、アレクサンドロヴァ、フォニャコーヴァ（スモレンスク）、E. K. ヤコブレフ、ロマーシ、チェルノフ兄弟、チェルノヴァ（モスクワ）、ナタンソンとその妻、ゲジェオノフスキー、サザーノフ、バシマチニコフ、ペシエホーフ、П. С. ステパーノフ（オリョール）など²⁾。また、それからほどなくして、ソートニコフ、ジリャコーヴァ、クリングも逮捕された。秋には、フレロフを中心とするハリコフ・グループも壊滅した。また、4月の摘発のさい、モンスクの印刷所は、印刷機が多くの文書とともに押収されたことにより消滅した。

このかん、「権利」党は、あらゆる反政府勢力の連合をめざして、様々なグループと接触を持っていた。しかし、1890年代前半においては、反政府勢力の連合は、リベラルはおろか、革命諸派のあいだでも困難であった。(A)「権利」党が最も友好的な関係にあったのは、同様の志向を持つロンドンの「基金」であった。「基金」は、「権利」党の「宣言」を「善い知らせ」³⁾と題して『小新聞』に掲載し³⁾、「焦眉の問題」については、「我々は……そのなかで述べられている見解を十分にわかし持つ」とのコメントをつけたうえで、「叢書」第17分冊として再版した。この再版は、「権利」党崩壊後のロシア国内で広汎に普及していたといわれる。また、1893年、コロレンコは、英米に旅行し、ステプニャーク、ヴォルホフスキー、ゴリデンベルク、ラザレフなど「基金」のメンバーと交流した⁴⁾。更にシロコーヴァは、彼の旅行のすこしあと、社会民主主義者のA. И. エラマソフとB. A. イオノフが「基金」のメンバーと接触したことも、「権利」党と何らかの関係があったのではないかと述べている⁵⁾。(B)これに対し、「権利」党と各地の「人民の意志」派グループとの関係は、必ずしも前者が思うようには進展しなかった。①パリの「古参『人民の意志』グループ《Группа старых народовольцев》」との関係は、ロシア革命運動史に関心を持つヤコブレフ（ボグチャルスキー）が、1892年にこのグループと接触したことが目立つ程度である⁶⁾。因みに、ラヴロフは、「権利」党について、「政治主義者—非社会主義者のマスクをつける」「仮面舞踏会的な試み」と評していた⁷⁾。またルサーノフは、「権利」党に深く関与したミハイロフスキーの檄文「自由な言葉」について、「検閲の許可なしで印刷されたという革命的事実よりも」その「内容が遅れているのが残念だ」と述べていた⁸⁾。社会主義の旗に固執し、リベラルに背を向ける「古参『人民の意志』グループ」が「権利」党と十分な結びつきを持ち得なかったのは、けだし当然であったともいえる。②国内の「人民の意志」派諸グループに対しては、「権利」党は積極的に

2) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 129-133. 彼女が付録の一覧表に挙げている112名の《народоправцы》のうち、逮捕された者は62名である。

3) 《Летуние Листки ФВРП》, №. 9 (94. 9. 25), стр. 1-2.

4) В. В. Широкова, указ. соч., стр. 121.

5) См. Там же, стр. 123-125.

6) См. Там же, стр. 120-121.

7) П. Куделли, указ. соч., стр. 157. また1890年代のラヴロフの考えをよく示すものとして, Cf. P. L. Lavrov in Emigration: An Unpublished Letter (by C. M. Hamburg), 《The Russian Review》, vol. 37, No. 4, Oct., 1978, pp. 449-452.

8) [Н. С. Русанов], указ. соч., стр. 4.

「人民の権利」党をめぐって——その形成から「崩壊」まで——

組織的合意を働きかけようとした。例えば、ニジェゴロドで1893年に形成された「人民の意志」グループ⁹⁾に対して、「権利」党はソートニコフを派遣して合意を訴えたようである¹⁰⁾。しかし、その結果は、せいぜいベレフスキー他数人が「権利」党に関与するようになった程度であった¹¹⁾。また、ペテルブルクの第一次「人民の意志」グループに対しては、ナタンソン、テュッチェフが自らペテルブルクに赴き、組織的合意をめぐってグループのメンバーと協議を重ねた。グループのメンバー・E. M. アレクサンドロヴァ (M. C. アレクサンドロフの妻) が協議のためオリョールへやって来たこともあった¹²⁾。しかし、「権利」党とグループのあいだには、ちょうど国外の「基金」と「古参『人民の意志』グループ」とのあいだの相違になぞらえ得るような、根本的な思想的相違が存在した。グループは、基本的に「人民の意志」主義の原則に立ち、「全階層党《всесловная партия》」の組織→党による権力奪取→臨時政府の樹立→憲法制定会議の召集という革命のプランを構想しつつ、さしあたり「全階層党」組織に向けた準備活動として、労働者工作を活発に展開していた。そして、グループは、その機関紙『小新聞』紙上で「革命的リベラリズムの原則に立ってあらゆる専制の反対者を連合《объединить》する」ことを「幻想」だとし¹³⁾、「我々にとっては、最も徹底かつ極端なリベラルとさえ、革命家をひとつの党に合同するという事は問題にもならない。それへのふたつの大きな障害は社会主義と革命である」などと述べていた¹⁴⁾。むしろ、このグループと「権利」党のあいだでは、文書交換などの活動は盛んに行なわれていた。因みに、グループのメンバー・ブラウドから様々な文書を受け取っていた¹⁵⁾ B. チェルノフのところでは、搜索のさい、大量のグループの出版物が発見されている¹⁶⁾。しかし、両者の組織的合意は、結局実現せず、両者は、別々のグループのまま、同時摘発を迎えるに至るのである。(C)「権利」党は、リベラルやマルクス主義者についても、これらを自らのうちに「合同」することができなかった。リベラルについていえば、「モスクワのリベラルの首領」¹⁷⁾といわれたゴリツェフやミリュコフが「権利」党に関与したものの、それ以上の展開は特に見られなかった。また、マルクス主義者については、「権利」党の活動家たちは、彼らと個々に知り合うことはあっても¹⁸⁾、マルクス主義そのものに対して批判的である場合が多かった¹⁹⁾。というよりむしろ、1890年代前半の国内のマルクス主義者は、長期的展望に立った労働

9) このグループについては、См. С. Слетов, указ. соч., стр. 40-41; Е. Кускова, указ. соч., 《Новый журнал》, 1957, Vol. LI, стр. 155-159. 当時ニジェゴロドにはマルクス主義者 (П. П. Рмиханцев, Крашин兄弟ら) がおり、論争が絶えなかった。

10) В. В. Широкова, указ. соч., стр. 100.

11) Там же, стр. 100-101. ベレフスキーは、1894年にはペテルブルクの第二次「人民の意志」グループのメンバーとなり、機関紙主筆となって社会民主主義的傾向を深めていく。

12) См. Там же, стр. 90.

13) П. Куделли, указ. соч., стр. 92.

14) Там же, стр. 77.

15) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 129.

16) Из “Обзора...”, стр. 245-246.

17) См. В. В. Широкова, указ. соч., стр. 92-93.

18) См. Там же, стр. 80.

19) См. Там же, стр. 81-83.

者に対する教育啓蒙活動や経済闘争の煽動に力を傾けていた。従って、彼らが、政治的自由の獲得を第一義的課題とする「権利」党に関与・参加することも、そもそもあまり考えられなかったように思われる。

むすびにかえて

以上のように、「権利」党は、1894年4月、本格的な活動に入ろうとしていた矢先、そのめざしたあらゆる反政府勢力の連合・合同に殆ど成功しないまま、権力の弾圧を受けて「崩壊」した。しかし、「権利」党が持っていた志向は、決してこの1894年の段階で消え去ったわけではなかった。あらゆる反政府勢力連合の試みは、周知のように1905年革命前夜においても、ロシア反政府党革命党会議（パリ1904年）を頂点として活発に展開された。そして、元「権利」党活動家たちは、こうした動きのなかで、「解放同盟」やエスエル党のメンバーとして、積極的に活動するに至った。因みに、やや先走っていえば、1894年4月以降、生き残った人々は、①様々な都市で、「読み書き普及委員会《Комитет грамотности》²⁰⁾」などに依って活動していく部分、②「人民の権利」結社を自称して活動していく部分、③『ロシアの富《Русское Богатство》』誌の編集者・協力者となっていく部分などにわかれた。このうち②の人々は、やがて労働運動の高揚のなか、マルクス主義への傾斜を強めていった。この傾斜は、特に、ストルーヴェの筆になる「ロシア社会民主労働党宣言」(1898)を冒頭に掲載した論集『われわれの時代《Наше Время》』第2号のなかに顕著にあらわれている²¹⁾。しかし、マルクス主義に「転向」した元「権利」党活動家たち(ボグダノヴィッチ、ヤコブレフ=ボグチャルスキー)は、その後いわゆる「合法マルクス主義者」となり²²⁾、「権利」党と同様の志向を持って活動していた²³⁾『ロシアの富』の編集者・協力者たち(コロレンコ、アンネンスキー、ペツェホーノフ)らとともに「解放同盟」の主導的メンバーとなった。他方、釈放後タムボフ県での農村活動を経て「農業社会主義連盟」の創設に加わったチェルノフは、そこで「基金」の活動家たちと出会い、パリ会議において重要な役割を果たすことになった。ガライは、チェルノフと『ロシアの富』の人々や彼と「解放同盟」評議会の元「権利」党活動家たち(ヤコブレフ=ボグチャルスキー、ビジャコーフ)とのあいだに存在した「密接な個人的結びつき」を考えれば、エスエル党と「解放同盟」との協力は、パリ会議がなくてもある程度までは起こり得ただらう、と述べている²⁴⁾。また、更にチェルノフによれば、このパリ会議前夜、ナタン

20) モスクワではモスクワ農業協会に付属して1845年創立。ベテルブルクでは自由経済協会に付属して1861年に創立。初等教育推進のための機関で、一般向けの読み書きに関する本の出版、頒布、販売、農村図書室の設立、小学校教師の養成などを行っていた。1895年以降、文部省管轄下に入り、「読み書き協会《Общество грамотности》」となる。

21) 《Наше Время》, №. 2; Свободный печати; Изд. общества Народного Права, 1898. 内容は、1897年6月2日労働時間法に関する記事、労働運動の状況、シベリアの小さな町で行なわれた「人民の権利」派、ナロードニキ、マルクス主義者の討論(マルクス主義者が勝利する)の模様を描いた作品「会話《Разговор》」など。

22) В. В. Широкова, указ. соч., стр. 157.

23) См. Н. Д. Ерофеев, Народные социалисты в первой русской революции, М., 1979, стр. 32.

24) S. Galai, op. cit., pp. 218-219.

「人民の権利」党をめぐって——その形成から「崩壊」まで——

ソンは、「別個に進んで共に撃つ」というチェルノフらの考えと異なり、「単一の超党派的綱領をもった単一の戦線」「より深く内的な綱領的戦術的見解の接近」を志向し、マルクス主義者との交渉を行なっていたことが知られる²⁵⁾。これらのことを考えると、「権利」党は、今世紀初頭に起こってくる「解放同盟」とエスエル党を含む広汎な反政府勢力連合の動きに対しその基盤のひとつを準備したものとして把えられる必要があるように思われる。

しかし、ここで述べた点、即ち、1894年4月以降の「権利」党活動家たちの動きや「人民の権利」結社の出版物の内容などについては、冒頭でも述べたように、また稿を改めて詳論することにした。

On the Party of People's Rights

Hisao INAGAKE

Toward the end of the 19th century a number of groups of Russian revolutionists were formed both within and without the country to advocate the union of all oppositional forces in the common cause of overwhelming the autocracy and establishing a constitutional regime. The most important of these was the Party of People's Rights (*Partiya Narodnogo Prava*), founded in Saratov in September 1893. The aim of this paper is to examine the process of the formation of this party and to give an outline of the contents of two documents it published in the spring of 1894.

This paper is divided into five parts, exclusive of an introductory note and a conclusion, as follows;

1. A look at groups which called for united action in the years immediately preceding the founding of the Party of People's Rights: the group which published the journal "Self-government" (*Samoupravlenie*) in Moscow (1887-1889); the so-called Sabnaev circle (1889-1890); the Tver group which issued the journal "Union" (*Soiuz*) (1893); the emigré group which published the newspaper "Free Russia" (*Svobodnaia Rossiia*) in Geneva (1889); The Russian Free Press Fund (*Fond Volnoi Russkoi Pressy*) in London (1891-1901).

2. The formation of the Party of People's Rights. This part centers on the activity of Mark Natanson (the leader of the party) and his circle between 1890 and 1893.

3. The expansion of the party network after the Foundation Congress in September 1893.

4. Two documents: "Manifesto of the Party of People's Rights" and "The Current Question" (*Nasushchnyy Vopros*). These were published in Smolensk where the party succeeded in setting up its own press.

25) В. Чернов, Перед бурей; Воспоминания, New York, 1953, стр. 208-209.

5. The relation between the party and other revolutionary groups, specifically : the Russian Free Press Fond, the Group of old *narodovol'tsy* in Paris, the Group of *narodovol'tsy* in Petersburg.

On 21 April 1894, the police struck simultaneously in various towns where the members and supporters of the party lived. Many members of the party were arrested and printing press was seized. This blow proved irrevocable as far as the party organization was concerned.

But, even after the "collapse" of the party, its influence continued to make itself felt. The conclusion briefly follows the activity after 1894 of the members who escaped arrest, and suggests that those who joined the Union of Liberation (Soiuz Osvobozhdeniia) and the SR Party later took an active interest in the movement to unite all oppositional forces on the eve of the revolution of 1905. In a subsequent essay, the writer will deal with the later activity of the members of the party of People's Rights in detail.

(This paper owes much to the only monograph on this party: V. V. Shirokova, *Partiya Narodnogo Prava. Iz istorii osvoboditel'nogo dvizheniya 90-kh godov XIX veka*, Saratov, 1972).